身土不二の秘密

大橋一夫

一　（２００２年４月）

エレベーターのインテリアは、白熱灯による間接照明の柔らかな光がブロンズ彫金に鈍く反射し、プラザホテルの格式の高さを感じさせるのに充分豪華なものであった。ドアが開き、敬淑がエレベーターからホールに出るのを見つけた人たちの間から拍手が起こった。駆け寄った知人たちと挨拶を交わしながら宴会場に入ると、正面の大きな横看板に『李敬淑著「身土不二」出版紀念会』と書かれた文字が目に入った。「身土不二」の四文字は、彼女が社長を務める韓国伝統料理チェーンレストランの商標に使っている隷書体のロゴをそのまま使っている。

舞台の両袖には献花の花瓶が並び、真ん中の一対の右の片方には『慶祝・李敬淑先生』、左の片方には『敬天愛人』と書かれた垂れ幕が添えられている。金大中大統領からの献花である。韓国の冬は厳しい。４月に入ると厳しい寒さに蓄えられたエネルギーが一気に爆発するように草木が一斉に芽吹き開花し、この時期の花が最も美しい。今日の服装を何にするか迷った末に、薄いピンク地に緑の草木の柄をあしらった『チマ・チョゴリ』にして正解だった、花瓶に活けられた花たちに合っている、と敬淑は思った。

立食パーティー用のテーブルには、バイキング形式の『ローストビーフ』、『小エビのフライ』など、定番の西洋料理に加え、『パジョン』、『骨付き蒸しカルビ』、『キムチ豆腐』、祝い事に欠かせない『イシモチの煮魚』などの韓国伝統料理も並べられている。酒類として、合法的ドブロクである『マッコルリ』も置いてある。

プラザホテルは、ソウル市庁前の複雑なロータリーをはさんで市庁の対角に位置する。このロータリーは、反政府デモなど幾たびか韓国現代史の舞台となりニュース映画などで海外にもよく知られている。

宴会場があるプラザホテル１９階の窓から眺めると、北方向には、約２キロ先の景福宮の上を超えて、白い岩肌と木々の緑が鮮やかなコントラストを見せる北岳山をはるかに望み、右手には韓国初の西洋式建築物である石造殿を擁する徳寿宮の庭園が見渡せる。

開会前のひととき、ドボルザーク作曲交響曲第九番『新世界より』がバックグラウンドミュージックとして低く流れていた。敬淑があらかじめリクエストしておいた選曲である。

定刻になり、司会者が開会を告げた。政府からの来賓の音頭によって乾杯が行われ、続いて、敬淑が所属するライオンズクラブの会長が祝辞を述べ始めた。

「李敬淑先生、このたびは『身土不二』の発刊、祝賀申し上げます。この本は先生が育て上げた『身土不二グループ』について書かれているのは勿論ですが、個人経営の零細店しか存在しなかった我が国の食堂業界において、チェーン店化を推進し、まさに外食産業を『産業』にまで高められた奮闘記が書かれております。現在では、外資系のハンバーガーショップに見られるようにチェーンレストランは珍しくありませんが、それに先んじて、

しかも韓国伝統料理によって成功を収められたのは、間違いなく先生のお力によるものです……」

敬淑は、先日テレビで放映された『成功時代』にも出演した。この番組は各界の有名人を取り上げ、インタビューと再現映像でサクセスストーリーを３０分番組で紹介するものである。冒頭の祝辞が終わり、歓談時間になったとき、『成功時代』のプロデューサーが手紙の束を持って敬淑のところに挨拶に来た。

「先日の放映後大きな反響がありました。韓国では女性経営者の話が少ないですからね。衛星放送を通じて日本にも番組の一部が紹介されたらしく日本の視聴者からも手紙が届いていますよ」、と言いながら手紙の束を敬淑に手渡した。一番上に乗っていた封書は、放送局気付の宛名が漢字で書いてあり日本からの郵便であることをうかがわせた。裏面の差出人は、『日本国神奈川県横浜市＊＊＊＊　山口英樹』と書かれていた。

＜ヨンスだ。ヨンスからの手紙だ……＞

封を切り便箋をとりだしてみると、はるかな記憶のかなたから甦るヨンスの上手とは言えない金釘流のハングル文字の文章が現れた。

二（１９７８年９月）

毎朝８時半から朝礼の司会を行い、その後、山口技術顧問室に行き、前日の製品検査結果を報告するのが、敬淑の班長としての日課となっていた。

朝鮮戦争の惨禍を引きずり、いたるところに荒廃がまだ残っている時期に敬淑は全羅道で生まれた。幼いときに相次いで両親を病気で亡くし、ソウルの叔母に育てられた。叔母の家は、いわゆる『ハコバン（箱房）』と呼ばれるベニヤ板で囲ったバラックであった。漢江鉄橋近くの河川敷は、このような多数のハコバンに不法占拠されていたが、叔母の家はその一軒であった。

敬淑が十歳になると、明洞繁華街の露天で雑貨を売る叔母の商売の手伝いをした。金銭感覚や交渉力がついたのは、幼い頃からのこの経験が大きく寄与している。困難な生活の中にあっても、叔母は学校だけは休まないように支援してくれた。学業を尊ぶ韓国の風土がそうさせたのであろう。

中学の成績は良かったが高校進学は望むべくもなく、卒業と同時に現在の勤務先である、従業員数５００名の『星光電気株式会社』に入社し、社員寮に入った。ハコバンからの脱出である。

配属された職場は、蛍光灯器具の製造で、ベルトコンベアーで流れてくる半製品に安全器を取り付けるだけの単調なものであった。１年後、『製造部製品検査課』に配置換えになり、最近、『検査第一班』の班長に昇格した。入社３年目の昇進で同期入社ではトップだった。もっとも、同期入社ではすでに半数が退職している。

「山口顧問様、おはようございます。昨日の検査結果です。最近は不良率が下がり安定しています」、と言いながら敬淑は検査報告書を見せた。

『９月２５日全製造数：１６００個、
うち不良数：５８個（その他、６個のラベル貼り付け不良があったが機能には問題ないので、特別合格とした）』

「特別合格にしたのですか？」
「はい。安全器の定格ラベルが天地逆さまに貼り付けられておりましたが、器具内部の見えないところですので問題ありません」
「『検査基準書』には『特別合格』という規定はない。基準書のとおりに検査するよう監督するのが班長の努めです」
「ラベルが逆に貼ってあっても蛍光灯は光りますから問題ないと思います」
「李敬淑班長、会社や組織では誰がやっても同じ結果が得られるようにしなくてはならない。基準書に特別合格の規定が必要だったら、まず先に基準書の改訂を考えてください。その場の勝手な判断はよくない」

山口英樹は、１９７３年に東京大学工学部電子工学科を卒業し、総合電機メーカーである『Ｔ製作所』に入社した。学生時代は、学園紛争の影響が尾を引き休講が多くアパートでは読書に費やすことが多かった。当時の日本社会の混乱の中にあって自然に目が外国に向くようになり、外国に関する書物をよく読み興味を覚えた。社会人となってからも、外国に関する仕事をしたいと会社に希望を出していた。

星光電気の創業者は、日韓併合時代に日本の大学を卒業しており、同級生がＴ製作所の幹部であることから、蛍光灯器具製造の技術支援を受けることができるようになっていた。おかげで、それまでの白熱電灯器具だけの時代に比べ、韓国での蛍光灯ブームにのって社業を大きく延ばしていた。山口英樹は、『技術顧問』として、２年間の約束で星光電気に派遣されていた。蛍光灯器具の設計・製造に対してＴ製作所の技術を移転することが任務である。

翌朝、敬淑はいつものように顧問室にやって来て、いつもどおり報告した後、段ボールを切って貼り合わせた手作りの小道具を見せた。

「特別合格させるよりも製造中にラベルの逆貼りが出ないようにするのが先だと気が付き、寮でこんなものを作ってみました」

その段ボールを安定器に押し当てるとラベルを貼るべき場所がくりぬいてあり、横にラベルの天地の表示がしてある。これを使えば貼る位置が一定になり、天地を間違えずにラベルを貼ることができる。

「製造課で働いているとき、やりにくい作業が多く、＜小道具があれば＞と思っていました。この段ボールを使えば、顧問がおっしゃるように、誰がやっても同じ仕上がりになります」

「なるほど、いいものを考えたね」。そのとき、英樹は敬淑の表情に微かな喜びが浮かび、瞳には星芒が光ったのを見のがさなかった。

１０月に入り、社員旅行の季節となった。従業員数が５００名にも達し、全社員が一緒に旅行することができなくなっていた。この年は、部課ごとに全体を四つのグループにわけ、それぞれ違う日程で日帰り観光バス旅行することになった。

英樹と敬淑たちのグループの行き先は、ソウル北部の『白馬』である。ソウルは軍事境界線から数十キロしか離れておらず、ソウルより北側の地域は危険地域とされ住む人も少なく、軍事施設が点在するだけの原野として不動産価格は捨値で放置されている。『白馬』は、そのような原野の中に位置するが、娯楽が少ない韓国では、週末のピクニック用に政府が簡単な整備をしている。週末だけしか人出がないので宿泊施設もなく、二軒の食堂が国鉄白馬駅の隣にあるだけである。

日曜日の朝、英樹が集合場所である九老工業団地の会社の正門前にやって来てまもなく、三台のバスは定刻の９時に白馬に向けて出発した。目的地まで１時間半の行程である。

バスの窓から街並みを眺めると、建物の看板や標識が全てハングルで表記され、漢字を見かけることは無く、政府の『ハングル化政策』が徹底しているのを英樹は感じた。ソウルの官庁街を通り抜けるとき街路樹の柳の枝が秋風に揺れ、目を楽しませてくれた。＜日本にはこれほど見事な柳並木は無いな＞と思った。

ミヤリを通過して郊外にさしかかり、車窓からの眺めが国道沿いに植えられたコスモスに変わった頃、幹事の音頭取りで歌が始まりマイクが人々の間に回された。歌われる曲の大半が『ポンチャク』と呼ばれる演歌である。日本の演歌の源流は、ポンチャクであると言われている。英樹は、＜確かに古賀政男のメロディーに似ている＞と思った。

マイクが回って英樹の番になったとき、誰かが「山口顧問様、日本の歌をお願いします」と言った。英樹は、韓国赴任が決まった頃、＜忘年会などで歌わされる機会もあるだろう。日本の歌は政府により禁止されているので何か覚えていかなくては＞と、『アリラン』とビートルズの『イエスタディー』を練習してきており、どちらかを歌おうとした矢先のリクエストだった。禁止されているが故に求める気持ちも強いのであろう、日本の流行歌が密かに歌われているのを英樹は何回か目撃したことがある。意を決して、英樹が『ブルーライト横浜』を歌い出すと、何人かが日本語で唱和しはじめた。

バスは白馬駅の近くに駐車し、全員がバスを降りた。ピクニック地とはいえ、それほど手が加えられておらず、灌木と雑草が主体の眺望の中に点在するポプラの大樹が、この地域の厳しい冬の気候を想起させた。

しばらく散策すると広く開けた場所に出たので、会社が用意したビニールシートと食べ

物で昼食になった。ビニールシートごとのメンバーの割り振りは決まっておらず、気のあった者同士が自由に席をとった。英樹は韓国語がそれほど出来ないこともあり、英語で話ができる部課長連中のグループに自然に加わっていた。

娯楽が少ない韓国では、ハイキングやピクニックが盛んで、『キン・バッ（海苔巻き）』や『ティキム（芋やイカのフライ）』など、携帯に適する食品が豊富である。それらを食べ、缶ビールでほろ酔い加減になり各グループからポンチャクが聞こえ始めた頃、敬淑が英樹のグループのところにやって来て自分たちのグループに移動するよう誘った。

「山口顧問様、英語でばかり話さないで、私たちのグループに来て先ほどの曲の歌詞の意味を教えてください」

「そうだね。韓国語の練習を兼ねてやってみましょう」

敬淑たちのグループは検査班の若い女性ばかりだった。英樹が歌詞の意味を説明し終わったあと、全員から質問攻めにあった。「何歳ですか」、「独身ですか」、「日本のお住まいはどこですか」、「故郷はどこですか」……。英樹は生真面目に回答した。「韓国と日本では、女性は、どちらがきれいですか」との質問に対して、「無論、韓国女性です」と答えると、「ワァー」という声と共に全員の顔がほころんだ。

帰りのバスは、各人がそれぞれ都合の良い場所に停車してもらい、流れ解散することになった。英樹は自分のアパートに近い永登浦駅前で停車してもらうよう頼んだ。続いて、「新世界百貨店で買い物をするので、私もそこで降ります」と敬淑が言った。

英樹と敬淑がバスを降りた永登浦は、日韓併合時代には『西京城』と呼ばれ副都心であった。付近には当時からの建物も多く残っており、樹齢を重ねたプラタナスの並木の美しさと、近くに金属加工の中小企業が多いことにより『労働者の街』としての二つの顔を持っている。

二人が百貨店に向かって並んで歩道を歩いているとき、敬淑は言った。

「買い物と言ったのは嘘です。もっと日本の話を聞かせてほしかったので同じところで降りました」

「そうですか。君とは仕事以外の話題でも話しあえればいいと前から思っていた」と言いながら、英樹は近くの『茶房（タバン）』に敬淑を誘った。

そのタバンは、４階建ての古いビルの地下にあり、歩道から狭くて急な階段を降り、時代がかったデザインの鋳物製の把手が付いた木製のドアを引いて中に入った。内部は薄暗い照明で、４人掛けのテーブルが１０卓ほどあった。各テーブルは、腰の高さの間仕切りで仕切られ、その上部はカーテンで隣のテーブルとの間が遮られており４人用の個室の雰囲気になっていた。英樹は『ＯＢビール』を、敬淑は『人参茶』を注文した。

「私、タバン・アガシ（茶房娘）を2日間だけやったことがあります」と敬淑は言った。

「タバン・アガシ？　知りませんが……」

「無給でタバンに待機していて、お客さんの話し相手をしてチップを貰うのです」

「話だけでは済まないのでしょう？」
「遅い時間に来るお客さんのほとんどは、店を出て旅館に行こうと誘いますね。寮の仲間でも毎日のように朝帰りして稼いでいるアガシも多いです」

当時の韓国では午前０時から午前４時までの間は『夜間外出禁止令』が厳しく施行されており、違反は重罪であった。軍隊のパトロールに見つかって射殺される事件もときどき発生していた。客と一緒に旅館に行った場合、午前０時までに寮に帰るか、午前４時まで旅館に留まるかしかないことになる。
「どうして２日でやめてしまったの」
「話だけならいいですが、好きでもない人と旅館に行くのは……」

１時間ほど雑談した後、英樹は話題を切り替えた。
「本で勉強するだけでは韓国語はなかなか上達しない。実際に使わないとダメだ」
「山口顧問様と話すのは楽しいです。いつでもかまいませんので話しかけてください」

５秒くらいの沈黙の後、「会社で話す程度では不十分なので、私のアパートに引っ越してきて住み込みで教えてくれませんか」と英樹は言った。

＜ついに言ってくれた。この言葉を待っていた＞と敬淑は思った。

当時の韓国は、日本からの技術移転が盛んになってきており、多くの日本人が駐在していたが、言葉や生活習慣の違いが大きく、大半の駐在員は妻子を伴わず単身赴任していた。その多くはハウスキーパーとして若い韓国人女性を雇い同居していた。１９７８年に入ると日本経済の躍進に伴い、円の為替レートは、１ドル、２００円を切り、１年前の倍の価値を持つにいたっていた。この円高を背景に日本人駐在員が韓国女性を『現地妻』として雇うことが常識化していた。駐在員を受け入れている会社側も、担当社員を付けて駐在員の身の回りのことや生活上の雑事の世話をするよりも手間がかからず、駐在員が自費で現地妻を雇うことを暗に勧めることが多かった。韓国の新聞は『性による日本の第二の侵略』と書き立てて社会問題化していたが、敬淑は、現地妻が全て悪いのではなく、相手によるのではないか。英樹のような人ならば一緒に生活したい、とかねてより思っていた。

敬淑は、尻軽女に見られるのを嫌い、即答したい気持ちを抑えながら、「アパートを見てから決めます」と答えた。

三

英樹のアパートは、外国人や政府官僚などを住まわせることを目的に建てられた高級アパートである。２ＬＤＫ、２５坪の専有面積は二人で生活するには充分以上であり、敬淑は自分だけの個室を持つことができる。家賃は星光電気が負担しており、家具や白黒テレビ（当時、韓国ではカラー放送されていなかった）、冷蔵庫、洗濯機などの電化製品もすべ

て会社が用意してくれた。これらは当時の中流以下の庶民には普及率が低く、ハコバンで育った敬淑には夢のような『新婚生活』が始まった。アパートでは、お互いに韓国語読みで、『ヨンス（英樹）』、『キョンスク（敬淑）』と呼び合った。

英樹が毎月の家計費として敬淑に渡す金は、１０万ウォン（当時の日本円で約５万円）であり、それは敬淑の給料の３倍であった。贅沢な食生活をしたつもりでも１０万ウォンの約半分は敬淑の貯金にまわすことができた。会社を辞めても金銭的には困らないが、＜少しでも英樹の近くにいたい＞と仕事を続けた。

普段の日は仕事が終わってアパートに帰ってきても、敬淑の家庭料理を楽しむ時間的なゆとりがなく、会社の帰りに買った出来合いの惣菜ですませたが、週末は敬淑の手料理を楽しむことが多かった。それまでは料理が得意というわけではなかったが、仕事と同じように、敬淑の改善に対する心意気がここでも発揮され、叔母から料理の秘訣を聞き出したり、英樹の味に対する反応を確かめたりしながら料理の腕は急速に向上した。グルメの連れ合いがいると料理人の腕が上がるのも早い。英樹はアパートでの食事だけでなく、有名な食堂に敬淑をよく連れて行ってくれた。敬淑はその店の味を盗むのにも長けていた。

「キョンスク、日曜日の夕食は野菜料理を作ってくれないか」
「おばさんがいつも、祭基洞の京東市場にはいい材料を売っていると言っていました。日曜日に一緒に買いに行きましょう」
「韓方薬を売っている街だね。韓国の食べ物は、食材なのか、薬材なのか区別がつきにくく、それぞれの材料が何らかの薬効を持っているとよく言うね」
「そうよ。『ワカメ・スープ』は、風邪を引いたときの熱冷ましにいいから、乾燥ワカメも買ってきて保存しておきましょう」。
続けて敬淑は、「『トラジ（桔梗）のナムル』は、男性の精力増強にいいそうです」と恥ずかしそうな顔で言った。
若さ故、当初ぎこちなかった性生活も、約１ヶ月経過してからは、毎回、頂上を極めることができるようになってきていた。部屋の防音も効いており隣人への気兼ねなく、毎日、お互いに満足しつくすまで交歓するようになっていた。

それまで、敬淑の男性経験は少なかった。会社の男と２・３回交渉を持ったことがあるが、乱暴で自分勝手な振る舞いは敬淑に苦痛を与えるだけであった。その男は、まもなく徴兵され江原道に駐屯した。初めのうちはよく手紙が来たが、半年もすると没交渉になってしまった。今頃は、どこの駐屯地でも近くには必ずある『女郎屋』にでも通っているのだろう。

英樹が日本にいるとき、つきあっている恋人がいた。彼女には打ち込んでいる仕事があることと、韓国での生活の困難を考えると、一緒に韓国にやってくることは無理であった。「別の人と結婚します」との彼女からの別れの手紙を最近受け取っており、やっと英樹の気持ちの整理がつきかけたところであった。

常時臨戦態勢の当時の韓国では、テレビ、ラジオとも華美な番組は無く、アパートではラジオの音楽番組を聴くのが二人の数少ない楽しみの一つだった。音楽番組は、演歌やクラッシック音楽主体の地味なものばかりであった。

『『新世界より』は、アメリカに渡ったドボルザークが、新しい国作りに励んでいる人々のエネルギーに感激して作曲したと言われている。アメリカはわずか２００年で世界一の国になった。こういったチャレンジ精神が好きだ」、と曲を聴きながら英樹が言ったとき、敬淑は、＜韓国人でこういうこと言う人は少ない＞と思った。

四

同居が始まってから1年半後、当初予定どおり英樹の日本への帰任の日が近づいてきた。お互いに『現地妻』以上の結びつきになってしまっているのは理解していたが、どちらからも「一緒に日本に行き結婚しよう」、とは言い出さなかった。その言葉が口から出てしまうと自分自身が苦しむばかりでなく、英樹を苦しませてしまうことを、敬淑は解っていた。経済的には問題ないが、当時の日本の社会状況では、韓国から来た妻の生活が容易ではなく、愛情だけでは生きていけないことを二人とも解っていた。

英樹がアパートを引き払う日になった。荷物は、友人に譲るもの、敬淑が新たに借りたアパートに持って行くものに分けて、すでに処分済みである。残っているのは日本に送り返す梱包済みの段ボールが１０個ほどであり、まもなく運送業者のトラックが引取に来ることになっている。

「キョンスク、布団も何もかも無くなってしまい、今晩はここでは泊まることができない。最後の夜はプラザホテルに泊まろう」

「うぁー嬉しい。明洞で叔母の露店を手伝っていたとき近くだったのでよく知っています。外国の大統領などの要人が泊まったとき、ものものしい警戒でした。そこにヨンスと一緒に泊まれるなんて！」

アパートの管理人室で鍵の返却など退去手続きを済ませた後、英樹と敬淑はタクシーでプラザホテルに向かった。英樹の荷物は書類鞄とスーツケースで、海外出張の雰囲気である。

プラザホテルではキングサイズ・ダブルの部屋にチエックインした。部屋はアイボリーの壁と薄茶色のファニチャー、カーテンの配色が、照度を落とした白熱灯の間接照明にマッチし落ち着いた雰囲気を醸し出していた。ベッドはすでにメーキングされており、最後の愛の交歓の準備は整っていた。窓から眺める夕暮れ時のソウルの景色は、この2年間の思い出とオーバーラップし、英樹に感慨を与えた。

＜４０年前、ここソウルには何万人もの日本人が住んでいた。征服者と被征服者の関係ではあったが日本人と韓国人の男女の出会いと別れが無数にあったに違いない。幸福になったカップルと悲恋に終わったカップル……＞

部屋に用意されていたポットのお湯で人参茶を作り二人で飲んでいるとき、英樹は鞄から書類を取り出し言った。

「覚えているだろう。これは『S半導体株式会社』の株券預かり証だ。これをキョンスクに残しておくので使って欲しい」

「値上がりしたと喜んでいた株ですね」

英樹は、二人が同居を初めてから最初のボーナスの全額はたいて『S半導体株式会社』の株式を購入していた。外国人が韓国の株を購入することは禁止されていたので敬淑の名義で購入した。『李敬淑』と刻印された印鑑を作り株のためだけに使うようにし、貴重品保管箱に大切に保存していた。銘柄の選択には頭を悩ませたが、韓国産業界の近い将来の発展を考えると、電子産業か化粧品会社の株が良かろうとの結論に達し、『S半導体』と『韓国化粧品』の二つの候補に絞り、最終的に『S半導体』の株を購入した。英樹の狙いは的中し、株価はこの一年間で6倍にもなり、時価は４００万ウォンに達していた。敬淑の給料の9年分に相当する金額である。

五（１９８４年6月）

最近、全線開通した環状線の地下鉄2号線新林駅付近は学生の街である。日韓併合時代、韓国では唯一の帝国大学であった『京城帝国大学』は、戦後、『国立ソウル大学』に改組され市内中心部にあった旧キャンパスを使用していたが、ここ１０年ほどは、学部の新設と学生増に対応した結果、市内外各地に分散し、『たこ足大学化』していた。政府は時代の要請に応えるために高等教育の充実を目指しており、その一環としてソウル大学もキャンパスを統合して、ここ冠岳区の新林洞近くの広大な丘を整地し移転していた。

敬淑は、英樹が日本に帰った直後、会社を辞め、英樹からもらった資金と銀行からの借入金を元手に新林駅近くの店舗兼住宅を購入し食堂を始めていた。

男性社会である韓国では女性が商売を始める場合、食堂、雑貨店（クモンカゲ）くらいしか成功の見込みが無かった。あらゆる商売は巨大財閥の傘下に組み込まれ、わずかに残った業種も男性経営者に占有されていた。食堂は、＜男子厨房に入らず＞の伝統的風潮の中で男性の進出が少なく女性の活躍が期待できる業種である。しかも、敬淑には英樹との生活の中で蓄積した料理のノウハウを書き留めた大学ノートがあり、どんな商売にするか頭を悩ますことも無く食堂を開業した。

英樹との寝物語の中で、日本の学生文化と自動車文化の隆盛を聞いており、韓国でも近い将来同じことが起こると聞いていたので、出店は、ソウル大学新キャンパスに近く、通学路にあたる新林駅の近くに決めた。＜学生は金を持ってなく商売にならない＞と思われていたので不動産価格の値上がりはそれほどでもなく、敬淑の資金と借入金で開業することができた。

店は4人掛けテーブルを１０卓配置し、叔母には厨房作業を手伝って貰った。　屋号は『身土不二』とした。韓国に伝統的に伝わっている「その土地で生まれた人間は、その土

地の食べ物を食べるのが良い」との考えを表した言葉である。理屈っぽい意味の屋号ではあるがインテリのソウル大学生にはあっている、と敬淑は気に入っている。

料理は、『麦飯定食（ボリ・バッ）』をメインに押し出すことにした。焼肉料理も考えたが、学生相手の商売では値段があわず、薄利多売の方針を貫くことができない。『麦飯定食』は大きなステンレスの韓国式どんぶりに麦飯を入れ、キムチ、ナムル、豆腐、小魚のフライ、佃煮などの小皿と韓国式味噌汁を添えるものである。いずれも注文を受けてから調理する必要はなく、あらかじめ大きな器でまとめて調理しておき、注文を受けてから小皿や碗に分け取るだけである。まとめて調理することと、敬淑のノートに書かれたノウハウどおりの材料選び、作り方をするので、いつでも一定の味を出すことができる。星光電気で英樹に教えられた、＜誰がやっても同じ結果が得られるように＞との考えが自然に実行されていた。提供される料理は韓国伝統料理ではあるが、『ファーストフード』のやり方をすでに取り入れていたことになる。

『健康食品、早い、安い、旨い』との評判は学生のみならず一般の人々にも口コミで広まり『新林洞の身土不二』の名前はソウル全域で有名になり売上も伸びた。開業以来４年経過した現在、借入金を返済し終わり、敬淑は支店を出すことを考え始めていた。そんなある日、閉店後のかたづけをしているとき、雨に打たれ、ずぶぬれになった若い男が入ってきた。店の常連のソウル大生、金大範である。

「姉さん、匿ってください」
「どうしたの。傘も持たずに」
「機動隊に追われました。家に電話したら警察が見張っているとのことで帰れません」
「叔母の部屋で休んでいきなさい。叔母は私の部屋で寝ていただきます」
「大変ありがとうございます。機動隊のやつら汚いんだ、デモ隊を校舎の間の風通しの悪い場所に巧みに追い込んでおいてから一斉に催涙ガスを使いはじめたのです」

１週間ほどして、ほとぼりが冷めた頃、金大範は敬淑の家を離れることにした。
「姉さん、ありがとうございました。これで失礼します。後日、またあらためてお礼に来ます」
「お礼なんていりませんよ。その代わり教えて欲しいことがあるの」
「何でしょう」
「支店を出したいと思っているの。支店でも同じ内容にしたいので、私のノートを元にして料理の秘訣や職務の注意事項を書いた『基準書』を作ってくれるところを紹介して欲しいの。支店の人がそのとおりにやれば、私が支店に行かなくても同じ雰囲気の店で同じ料理が出せるわ」と言いながら、敬淑はノートを見せた。
「食堂に基準書ですか！」
「会社で働いているとき、基準書を活用して、ばらつきの無い製品を作ることの大切さを知ったのよ」
「姉さんには、まいったなぁー。私の専攻は『経営工学』で、大学ではそういうことも

勉強しているんですよ。実地の勉強にもなるから、私自身で基準書を作ってみます。秘密の内容も書かれているでしょうから業者に頼むよりはいいと思います」

２週間ほどして金大範が持ってきた基準書を見て敬淑は驚いた。これまでに見たこともない印刷で、箇条書きや表を上手に使い、解りやすい表記になっていた。

「わざわざタイプライターで書いてくれたのですか」

「これは、アメリカで開発され韓国にも輸入され始めたＩＢＭ／ＰＣというコンピューターで書きました。大学の研究室にあるので空いている時間に書きました。印刷だけならタイプライターでもいいのですが、これだと修正や追加が簡単で将来のことを考えるとこちらの方がいいと思います」

「そうですか、じゃあ内容を読んで修正があればお願いします」

「簡単に修正できるので遠慮無く言ってください」

六

敬淑は、学生の街を物色し新村ロータリーの近くに支店を出すことに決めた。新村には私学の雄、『延世大学』と女子大の最高峰、『梨花女子大学』があり、立地としては申し分ない。

基準書があっても、実行する人、監督する人（店長）がいなければうまく運用できない。店長を見つけるのに苦労した末、名案が浮かんだ。星光電気の検査班で後輩だった朴善子が結婚退職し、夫の給料だけでは不足で仕事を探していることを聞き込み、誘ってみたら快諾してくれた。検査班に働いているとき、朴善子は敬淑の指示を素直に受け入れてくれ、『均一な製品作り』の考えをよく理解してくれていたので、店長としてもうまくやってくれることであろう。

新村支店の開業日には金大範もお祝いに駆けつけてくれた。

「基準書が活用されているのを見ると私も嬉しいです。近くの大学には民主化運動の仲間も多いですから宣伝しておきますよ」

新村支店は、短期間のうちに営業成績を延ばし、敬淑の狙いと事前準備が良かったことを事実で証明した。この成功を次々と応用し、以後一年半に一個所のペースで支店を増やすことができるようになった。

９０年代に入ってからは、もう一つの英樹の言葉である『自動車文化』が、いよいよ韓国でも現実のものとなってきたのを敬淑は実感し、郊外やニュータウンにも出店するようにした。１９９４年に開業した『盆唐支店』は、その中でも最も成功した例で、郊外型大規模スーパの近くに開業し、マイカーで来る客のために思いきって駐車スペースを広く取った。韓国社会は伝統的な大家族主義から核家族化への急速な変貌を遂げており、ニュータウンでは若い家族連れがマイカーで外食するのが定常化してきた。身土不二は時代の波を先取りする形で次々と成功を収めていった。

金大範は、大学院に進学、卒業して財閥系のＨＤ自動車に入社した。社会人になってからも学生時代同様に新しい支店が開業するときは、いつも開店祝いに来てくれた。開店祝いの後、「一緒になろう」とプロポーズしてくれたことも何回かあったが、二人の『本貫』が同じことにより韓国の法律では入籍ができないことと、事業に熱意を持ちだした敬淑は家庭に入ることを望まず、「このまま愛人関係でいましょう」と答えた。お互い忙しい身でありながら、数ヶ月に一回は人目を避け、済州島や雪嶽山などの観光旅行によく行った。同居とはまた違った関係で、お互いに充実した年月を過ごすことができたが、大範が『ＨＤモータースＵＳＡ』の副社長に栄進し、シカゴに赴任してからは逢う瀬を楽しむことができなくなっていた。

終章（２００２年４月）

『金釘流ハングル文字による山口英樹からの手紙』

謹啓、山口英樹です。覚えておられますか。

あれから２２年経ちました。その後、韓国には何回も出張しましたが敬淑さんは退社されたとのことで、そのままになってしまった非礼をお許し下さい。

最近、衛星放送のニュースで韓国の伝統料理ブームのことが報道されました。同姓同名の別人かとも思いましたが、顔が写ったとき間違いなく敬淑さんであることがわかりました。立派に事業を興され成功していらっしゃる由、心から祝賀いたします。

日本に帰った頃から、日本ではバブル経済が始まり、我々技術者は多忙な会社生活送りました。ここ数年はバブルの崩壊に伴い、多くの会社では、いわゆるリストラを行っています。私も５０歳を超えて該当年齢に達したので新しい可能性を求め、思いきって早期定年退職に応募してＴ製作所を退職しました。幸い、技術を持っていることと、敬淑さんに教えて頂いた韓国語の特技により、Ｓ電子の技術顧問として韓国で働くことが決まりました。

入社の挨拶とアパート探しのため５月の１５日頃から１週間ほどプラザホテルに滞在しますので一度お会いして久しぶりにお話しできればと思います。敬淑さんのご都合の良いときにホテルまでご連絡ください。

それでは敬淑さんのご健康と発展を祈り、失礼いたします。

山口英樹

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

敬淑は５月１５日になるのを待ちきれず、会社の事務員に命じて英樹の自宅の電話番号を調べさせ、英樹が家にいる可能性が高い夜の時間帯を見計らって自ら電話した。

「もしもし、山口です」。電話の向こうから、昔と同じ、ややぶっきらぼうな英樹の懐かしい声が返ってきた。

「ヨボセヨ、私は韓国の李敬淑です」

「キョンスクさん！　お久しぶりです」。英樹は、しばらく使っていなかった韓国語を思い出しながらゆっくり話したが、まもなく昔のペースで話すことができるようになり、２２年ぶりの二人の会話は３０分ほど続いた。

英樹は日本に帰って３年ほどしてから結婚したが、仕事があまりにも多忙で家庭を顧みることができず、寂しさに耐えかねた妻は去って行ったとのことであった。

５月の英樹の訪韓のときは、新たにオープンした仁川国際空港まで敬淑が出迎えに行きホテルまで案内することを約束して電話を切った。

英樹が到着する日が来た。敬淑は服装を何にするか迷った末、空港で英樹が見つけやすいように、昔よく着ていたのと同じ黒のスーツに決めた。今では学校の先生でも着ないような地味なものだが、最近は公式の会合への出席が多く必要にせまられ持っている。色白で、細くて漆黒の髪を持つ敬淑にはよく似合う。

敬淑は、城南市にある自宅から愛車の現代グレンジャーを自ら運転して出発した。途中の南漢山城跡付近の山道ではアカシアの白い小さな花が咲いているのが目に入り、＜英樹はアカシアの蜂蜜が好きだった＞ということを想起した。

＜２４年前、好意を持った英樹に気に入られようと行動しただけだったが、結果的に英樹からは大きなものを貰うことができた。あのときは、英樹が現地妻になってほしいと言い出した。でも今日は、私からもう一度現地妻になろうと提案してみようか、それとも国際結婚の方がいいかな。身土不二の日本進出についても相談してみよう＞

まもなく車はソウル外環高速道路に入った。アクセルを踏み込むとＶ６エンジンは力強く回転を上げ、さらなる『新世界』に向かうかのごとく加速を始めた。

了

（原稿用紙４３枚相当）